

裕樹君はどんなところで、どんな人に囲まれて、そしてどんな仕事をしているのだろう・・・、と思いながら彼を訪ねました。「僕は一応全部の工程はできるんです」とムーとする工場でニヤッとしながら話す彼は実にたくましい好青年になっていました。高校時代はいつも体育館でプロレスや、追いかっこ（追いかけられっこ）をしてはしゃいでいた彼と目つきだけは同じだけれど、自信とも思える心の張りは一目でわかりました。「夏は暑そうですね」とあらためて工場を見渡すと、社長さんが若い頃、つまり創業の頃使っていた古い機械が目に入りました。年季の入ったものですが、今ではどうも使えないと言っていました。50年という年月をこの工場は自信を持って働き続けてきたのを肌で感じてあとにしました。裕樹君は高校時代の細く白いハチマキではなく、太く強そうなタオルを頭に巻いて深々とお辞儀をしました。20年なんてまだまだだなあ、とつくづく思いました。そして、職人の誕生を見ました。

❖鈴木 真一さん

川間中－12期生－(有)朝比奈建設

❖鈴木 智子さん

川間小－西武台中－12期生主将－千葉商科大学卒
日の丸自動車興業株式会社



夏になると、瀬能（智子さんの旧姓）さんの実家でバーベキューをやりました。第12期生が中心ですが、大勢集まりいいものです。高校生の頃から、仲が良かった二人は結ばれました。そして2006年冬にかわいいbabyが誕生。名前は拓真。

智子さんの身長153cm。その年のインハイ出場選手で最も小さく、まさかベスト8に入るとは、本人さえ思っていなかったことだと思います。だけど、頑張っている人には、必ずバックアップをしてくれる人が集まるものです。特に12期生の男女みんな、親、親戚、友人、みんなみんなが応援してくれました。この小さな巨人は、数えきれないほどの手で支えられ、高く飛んだのです。その手の中に、指と指を赤い糸で結ばれた進一君が、真ん中で持ち上げていました。

三人の幸せは、みんなの幸せです。はやくバドミントンやらせて下さい。

❖田部井 亮さん

流山北部中－9期生－千葉商科大学卒

❖及川 義明さん

松伏中－11期生－千葉商科大学卒

❖島田 寛之さん

松伏中－12期生－千葉商科大学卒

〈ちば県北農業協同組合（JAちば県北）〉



左から 田部井さん・島田さん・瀬能さん・及川さん

西武台は地元のバックアップで生まれ、育まれ、今にいたっています。特にこの野田は農村部が残り、JAには大変御世話になっています。

そのJAに、さらにOBがお世話になっています。田部井君、第9期のヒーロー。そして及川君11期、島田君12期、みんな同じ高校、大学のバドミントン部です。だからJAでチームができるのです。さらに今春、山下君（15期生）が入ることになっています。

この3人は苦勞をしていない様に見えるくらい明るく元気ですが、苦勞を感じないたくましさがあるようです。お笑いのユニットを作ってもいいと思います。

町の中をJAの車でまわっていると思います。見かけたら、声をかけて下さい。好青年ぞろい(?)です。2007年2月現在、みんな独身です。ちなみに3人の上司の上司に瀬能さん（12代保護者会長）がいらっしやいます。お世話になります！

❖野澤（旧姓川鍋） 浩一さん

野田二中－４期生

(有)HIT

❖川鍋 拓也さん

野田二中－７期生－キノエネ醤油(株)

(有)HIT



左から お父さん・拓也君・お母さん・浩一君

Hirokazu の H、Ichirou と Aiko 愛子から I、Takuya の T、で HIT (ヒット)。これが川鍋製作所の社名です。浩一さん、その実弟の拓也君、そしてお父様の一朗さん、お母さんの愛子さん、その家族全員が働く、岩名の新しい工場に訪ねました。

年末の工場は音も雰囲気も忙しそうでした。働いている皆さんには失礼ですが、忙しいと安心します。

思い起こせば長男の浩一君が卒業を迎える頃、日本はバブル景気に急な終わりを告げました。その煽りを食らった会社や人々は、まるで地面にたたきつけられるように世間に放り出されました。川鍋製作所もそのひとつ、そんなどん底の暮らしから立ち上がって、はい上がってきたのは「家族愛」があったからです。落ち着いて、いつもにこやかな、民謡はプロ顔負けのお父さん。バドミントン部の保護者会を立派にこなし、息子２人の他に、私の娘（秀穂）まで育ててくれ、私を数知れず支えて、かばってくれたお母さん。いつもしっかり、常にチームや友達、そして両親、弟を考え続けている長男、芸人顔負けのひょうきん者次男。それぞれがそれぞれの家族として、社員として互いのリズムをごく自然に合わせ、笑いあり、涙ありの素晴らしいハーモニーを作る一家なのです。時には松竹映画の人情家族、そしてある時はドリフの大爆笑家族、それは日本の「正しい家族」そのものです。西武台のバドミントンはこの様な

「家族」に支えられて生きてきました。そして西武台のバドミントンも一つの家族になってきます。いつ出て行っても、いつ帰ってきても暖かく見守ってくれるそんな自然な人間の集まりであってほしいと願っています。

忙しく訪れたのは年末のとある日。奇しくも野田市民体育館で日韓中学生の交流大会が行われていました。「今、野田に韓国の中学生在が来ているから、すぐ戻らなきゃ…」と言うと、お母さんが帰り際に車の窓越しに「それなら、これもって行きなよ！」と家にある本場韓国の大きな『KIMUCHI』のパック詰めを私に渡しました。これが、川鍋家のひょうきんで暖かい『KIKUBARI (気配り)』なのです。感謝、感謝。

❖岩立 祐一朗さん

大津が丘中－１２期生－二松学舎大学卒

(株)サンワ 営業部

昨年秋、祖母を亡くした岩立君、その直後お父様の入院、寝たきりのお母様、そしてフィアンの御母様のご病気と、公私ともに窮地の折、この記念誌のため奔走してくれました。

１月中旬の日曜日、その岩立君が「打ち合わせ」といって体育館にスーツ姿で現れました。その日は小野先生もいらっしゃり、いつものように愛想良く話していましたが、「明日、私たちは結婚します」と、唐突に切り出した直後に彼の目に涙があふれ出しました。聞くと彼女の御母様の様態が悪く、ひと月もつかどうかという状況、「昨日、病院のベッドの脇で御母様に結婚することを話すと、意識が遠のいている中でもはっきりと喜んでくれたんです。」と言い、早速月曜、役所に婚姻届を出すことになりました。

翌、月曜日の晩、「本日無事に入籍致しました」との電話がありました。しかしその後「御母様も本日亡くなりました。」と涙声が続きました。

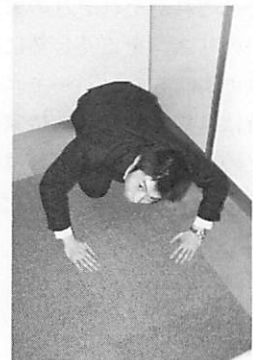
「悲喜こもごも」と言いますが、このときばかりはショックで私も話しになりませんでした。しかし、「この記念誌はいい加減に作れない。自分の責任で作らなければ、」と改めて決心したのでした。

明るく元気な岩立君が再び西武台に来てくれる日を待ちます。ありがとう。

よも一室（福岡武田）発行の
「新書」中二田新
「新書」中二田新
「新書」中二田新
「新書」中二田新
「新書」中二田新



頑張ります。



すみません